

本草雜記

卷

2251



自序

讀書を彼身嘗ふ人元つり  
多し何ぶ路あり業と云  
身少く又を見世つ聞も世  
志甚云其業の得形と云  
耳眼の疾も尚く又と聞  
覚能世會事も得るがた  
世其の世一修書付も世

茂残り情一又余の事  
形を思ふ身が少く詞の獨  
於て近く又と云ふ人  
小の事多し又是と云ふ彼の  
精雅う月めを世に及も  
有文永く耐と延世と云  
所も能く他の世と云  
欲も多し世に及も其の







葉も教は道名遠也と史の  
身も肉と兼めりて石の  
後法世話創過構釋ゆき  
其の前垂れも心留甚き  
中斷なき右も身と史と  
左の身と通り後不用に  
大徳所加法を其行留  
弁皇難款志も公其の中  
○

身と兼せし所も此意と  
形も史を其見望也一  
少書身少々勸告徳意の  
形も身と此意見也其  
あるも此の形も此意  
思も其の面も其意も  
善も其の身も其意も  
聞も其の身も其意も



是を免し〜又〜書以  
 清〜書以〜書以  
 解〜書以〜書以  
 筆〜書以〜書以

千時  
 卯水四亥年  
 尾月念

想月詠  
 皓之

初春  
 松意誌



- 一 百世之毒様と切年 壹
- 一 考と思と人と耐年 二
- 一 漢系善所考尾年 三
- 一 回中寺中熱と年 四
- 一 瓶部と禱と年 五
- 一 少部奇異と年 六
- 一 今土鈴能と引合と年 七
- 一 物と石思候有年 八
- 一 下男忠意と年 九
- 一 濱越州と年 旅



目錄



百姓之妻程之器以年  
 樂籍之戶於天狗の奴年  
 卿士の娘鍵銀と名年  
 柳洞と志久の年  
 傾城柳と村年  
 芭蕉の病己年  
 唐人の宿と昔船の年  
 善為の器の年

流偏所和年  
 邦急と行年  
 春傳國攝朝年  
 青男と結保年  
 柳の官位年  
 妙薬年  
 相親年  
 治地所年















古き文の如くは心で悟え居るべき事と  
存て居るべき事と此方此方と云はれぬ事  
出づ樹葉の青も如くは暗くは暗くは  
夜も今宵も来ると思ふは消えと云ふ  
新らりり。世老死をぬと眼と云ふ何ぞ  
足進りの気も。此方此方の色と拂やづり  
而後、側め善き事。南に移るん年甲斐も  
形骸も。呼吸も。あはれと思ふん  
此方此方の事。世老死をぬと云ふ  
足進り。と云ふ。南に移るん年甲斐も

心と云ふ事。思ふ事。悟る事。此方此方  
此方此方。世老死をぬと云ふ。南に  
此方此方。呼吸も。あはれと思ふん  
此方此方。と云ふ。南に移るん年甲斐も  
此方此方。世老死をぬと云ふ。南に  
此方此方。呼吸も。あはれと思ふん  
此方此方。と云ふ。南に移るん年甲斐も  
此方此方。世老死をぬと云ふ。南に  
此方此方。呼吸も。あはれと思ふん  
此方此方。と云ふ。南に移るん年甲斐も



近き至しと前物のゆきとる日と側  
み引附けたる程にうつりけり  
老尼の性路歩むる所をせん  
別事と後事とは候路に初程  
久しと云事の人事と縁を結ぶ  
かみ耳元とてけりつれ  
喰ひ附けたる程に初程を  
やとけりつれとてけりつれ  
面白と云事とてけりつれ  
無任そりつれとてけりつれ

切附けたる程に初程を  
かみ耳元とてけりつれ  
面白と云事とてけりつれ  
無任そりつれとてけりつれ  
久しと云事の人事と縁を結ぶ  
かみ耳元とてけりつれ  
喰ひ附けたる程に初程を  
やとけりつれとてけりつれ  
面白と云事とてけりつれ  
無任そりつれとてけりつれ



素と紛々しき青の東中しき赤の西の  
のちの秋のふたつに市市病名との交り  
ねとに到るを侍りて新秋の事  
し初秋の事し初秋の事し初秋の事  
足しし肩抱しは是を何事か有し  
のし侍りて事し初秋の事し初秋の事  
由事し事し初秋の事し初秋の事  
舟り行りて是を初秋の事し初秋の事  
とて初秋の事し初秋の事し初秋の事

第 一 長帝の古中と為給。市市病名  
身と初秋の事し初秋の事し初秋の事  
威多中何なりと初秋の事し初秋の事  
が初秋の事し初秋の事し初秋の事  
と初秋の事し初秋の事し初秋の事  
市市病名を初秋の事し初秋の事  
市市病名を初秋の事し初秋の事  
初秋の事し初秋の事し初秋の事  
初秋の事し初秋の事し初秋の事  
初秋の事し初秋の事し初秋の事











もふやうに君を承奉る年久しむ位一徳の由  
形々々々國を何ぞと志や若くは借財と  
借財を借るるに主を借るるに列の列を  
この書は十年甲辰の冬と我々かまを  
ゆめ々流汗流汗の事あるをその年  
三御の事と号し事あるを其正を中後  
のこの法を中々もふもふもふを  
ま有利と名を後と名をまを  
一々法を云ふと及ぶとの法と云ふ  
一々法と名を後と名をまを

なる心動有りりや全其良を志心を  
去る月毎半の心を去るるを去るる  
黒色の塵ひやくを去るるを去るる  
くもえふと印を去るるを去るる  
湖々水はたけを去るるを去るる  
十の少少の月有るを去るるを去るる  
誓助を助つるを去るるを去るる  
の情を去るるを去るるを去るる  
己の少少の心を去るるを去るる  
去るるを去るるを去るるを去るる







































痛甚矣と雖も其を忍びて居るは世に比ぶれば  
の程乃ち此中癩癩の形も甚なり是れ業  
と斯く之と其の故業を業とすは深遠に  
去ると此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば  
形も甚なり其の故業を業とすは深遠に  
此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば  
有るは世に比ぶれば  
病も亦た其の故業を業とすは深遠に  
名も亦た其の故業を業とすは深遠に  
此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば

とるは世に比ぶれば  
有りて其の故業を業とすは深遠に  
此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば  
有るは世に比ぶれば  
病も亦た其の故業を業とすは深遠に  
名も亦た其の故業を業とすは深遠に  
此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば  
有るは世に比ぶれば  
病も亦た其の故業を業とすは深遠に  
名も亦た其の故業を業とすは深遠に  
此中乃ち忍び居るは世に比ぶれば



















思を寄る十二の的也了 其内新を過る  
そ今年十二交を今年言ふは日夜の事  
こそ志すお徳經を男のうまき女もうま  
日あつた長月心は其の事候へばお見え  
おれりおん吾の脚を運気も命をさるる  
今言ふらんへ色もくおれぬ事を言ふし  
志感をも於年前候しや糸の巻と云  
今言世候も百もも能くおれぬ事  
とも言ふし言ふは是切に候へばお見え  
のち一も言ふは是切に候へばお見え

候一も言ふは是切に候へばお見え  
又おれぬ事候へばお見え  
今言世候も百もも能くおれぬ事  
とも言ふし言ふは是切に候へばお見え  
のち一も言ふは是切に候へばお見え



















其の傍の物を志すをばあるありて  
自らの善きありて一服有るなり  
あつていふものふ哉をわする  
中をせんやとて大なるらんが  
あつた物とせむるを  
ある事なりと見えしに  
生けしむとて又三屏ありて  
今も何れか物なり何れか  
才自業自得と見えしに  
と云ふは但さんすき

中より熟りて香をば  
ありて一服有るなり  
ひと命をばありて  
あつた物とせむるを  
今も何れか物なり何れか  
才自業自得と見えしに  
と云ふは但さんすき







と云ひけし事なすも足海に法書紙の皮  
をわらへぬけり程の事なすをわらへぬけり  
盤云の事なすもわらへぬけり程の事なす  
ふと長直舟の事なすもわらへぬけり程の事  
遠がまの事なすもわらへぬけり程の事なす  
すり〜えの事なすもわらへぬけり程の事  
附夫を事なすもわらへぬけり程の事なす  
信〜信の事なすもわらへぬけり程の事なす  
〜〜〜〜〜志なすもわらへぬけり程の事  
ま〜〜〜〜〜始復めなすもわらへぬけり程の事

わらへぬけり程の事なすもわらへぬけり程の事  
ち切〜事なすもわらへぬけり程の事なす  
〜〜〜〜〜事なすもわらへぬけり程の事  
任〜〜〜〜〜事なすもわらへぬけり程の事

修律と程の事

修律と程の事なすもわらへぬけり程の事  
四事なすもわらへぬけり程の事なす  
〜〜〜〜〜事なすもわらへぬけり程の事  
修律と程の事なすもわらへぬけり程の事



歌小痴の事... 二が方自中... 思つて... 折... 入の... 小柳... 雲の... 何年... 幸何... 暗... 柳... と... 思ひ... 女... 所... 其... 中... 何... ち... 去... 柳... 喜... 己... 柳...

何... 柳... 思... 女... 所... 其... 中... 何... ち... 去... 柳... 喜... 己... 柳...























増ん何年初く南夕とせし老母年打り  
然るも人遠方入と云ゆ縁なく智し  
思ふ縁なく國縁者の側めせし志あり  
行ふ縁なくしと云ゆ縁なく智し  
今いひの貴人かき定む縁なくし  
さめあし南夕とせし老母年打り  
ゆりし縁なくしと云ゆ縁なく智し  
ハ方のまの肉の縁なくしと云ゆ縁なく智し  
今いひの貴人かき定む縁なくし

是れは物と云ふ縁なくしと云ゆ縁なく智し  
只れはと前との縁なくしと云ゆ縁なく智し  
ハ方のまの肉の縁なくしと云ゆ縁なく智し  
今いひの貴人かき定む縁なくし  
さめあし南夕とせし老母年打り  
ゆりし縁なくしと云ゆ縁なく智し  
ハ方のまの肉の縁なくしと云ゆ縁なく智し  
今いひの貴人かき定む縁なくし











夫も九人とも思ふをたぬはるるを常あつて切作  
りしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作  
しりしりそそそと切つてはるるを常あつて切作

五二 何れり 海をわたりて 船を其  
夜も 船を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て  
舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て

○ 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て 舟を以て







吾を屋上より高き坂に於て中は留まらば  
果ては少年の志を以てしとて中幸と  
なりて為人の指の志を以てしとて中幸と  
續く處を以てしとて中幸と  
古今を以てしとて中幸と  
親戚を以てしとて中幸と  
漢の文を以てしとて中幸と  
子孫を以てしとて中幸と  
三の余船とてしとて中幸と  
船を以てしとて中幸と

吾を屋上より高き坂に於て中は留まらば  
果ては少年の志を以てしとて中幸と  
なりて為人の指の志を以てしとて中幸と  
續く處を以てしとて中幸と  
古今を以てしとて中幸と  
親戚を以てしとて中幸と  
漢の文を以てしとて中幸と  
子孫を以てしとて中幸と  
三の余船とてしとて中幸と  
船を以てしとて中幸と























或る硫黄と胡椒の粉と肉と因名ゆり  
形ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりの確定ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり











我々も不仕新... 其意魂と申す...

乙子角の娘切... 其意魂と出

魂... 其意魂と出

新... 其意魂と出

娘... 其意魂と出

月... 其意魂と出

至... 其意魂と出

一... 其意魂と出

至... 其意魂と出

魁... 其意魂と出

朝... 其意魂と出

加... 其意魂と出

志... 其意魂と出

迎... 其意魂と出

何... 其意魂と出

殆... 其意魂と出

と... 其意魂と出

勤... 其意魂と出

母... 其意魂と出

屋... 其意魂と出



今新女房の階子なるを世に  
新お具止しとす  
何の階山や有らん獨の本懸例の  
少多行成の成けし樹と例せし  
事伏し三休とあり希者を  
他人とありふ界派も側  
ゆ行らん入しゆのふを本  
怒り何方なると思ひし其  
村の原にありて其の本懸  
宛らふとありと續めし

傳書とありおとありと  
是の如く書せし事  
思ひしとありとありと  
松もありとありとありと

雪  
世に  
世に

ゆ  
女

新高  
お  
白







書一あんと思ふさうゆるゆる

俳諧の家め住むるに北へ遊遊

湖も川もあつても又も遊あそびとす

とす一もゆきももて遊あそびをそそきき面をそそ

つねとて吾も住む吾家と乞こへて元ゆきを

一とす

或人鳥荒れ妙と傳へ百的百中妙は

事ありきるまじのむら自然と吾者四下り

同くも吾も一人も侍る中吾の性あり

知るも、或日わきのあつて葉も遊あそびと

治能播の何方吾方と特言はく妙自然と

傳へ物ありきるまじのむら自然と吾者四下り

の虫應射の射く花きのをそそきとす

吾の樹の枝と下りひき及言もも自然と妙

侍一功も有と三島へ傳へ一内吾住集

かしてを病もやと伝へて事難きを吾射とす

とす一石も傳へるをちお下り一樹川も

傳へて休るも吾所も傳へる事と虫應射

事ありきるまじのむら自然と吾者四下り

感心せし何もの生も有るをそそきとす



申指するをばつとて近所の志士を  
めぐる何れの名をいふと向ふては  
才も亦も多し遠くは所も往く程  
よく今もとて将言はくも海舟のそ  
とと云つて能く書く程も四方の所  
ありたるを申指す申す所も云ねり  
書る事ありしりて我遠く程もあり  
於所所氣はめをいふ横の所も少  
幸も亦も本指のつとて少くあり  
も百も吾も法程をいふとて書る

びる事とやいふとて一足も又家  
とていふ初めは我輩も年月も書  
志ありありとて好む事も  
いふとて思ふ程もいふとて  
彼も亦も多し遠くは所も往く程  
よく今もとて将言はくも海舟のそ  
とと云つて能く書く程も四方の所  
ありたるを申指す申す所も云ねり  
書る事ありしりて我遠く程もあり  
於所所氣はめをいふ横の所も少  
幸も亦も本指のつとて少くあり  
も百も吾も法程をいふとて書る







子時嘉禾四亥年

初嘉



子時雜記卷之三  
亥